

所謂中性定冠詞 lo の語彙論における位置

荻 原 寛

0.

伝統文法においても、諸般の辞書においても、lo は2つの品詞に分類されている。即ち定冠詞と代名詞である。教育の現場においては「中性の定冠詞 lo」という呼称は自明のものとして今日に至っている。本稿では主にいわゆる定冠詞 lo をめぐって考察を進めて行くが、その動機は、スペイン語の名詞は男性女性2つの性しか有さないのに、何故中性定冠詞 lo が存在するのか¹⁾、という疑問にある。中性が認められるのは、esto, eso, aquello, ello などの代名詞、節や句などと照応関係にある lo だけである。名詞レベルに中性は存在しない²⁾。

(1) el libro

(2) la mesa

(3) *lo Ø

また、形容詞は lo によって名詞化され、事物の抽象性を表わし、相応する抽象名詞と意味の上で同価になる、という通説がある。この場合、果して lo+形容詞が抽象性を持ちうるかどうか、即ち言葉の正しい意味で「抽象」たりうるかも疑問に感じた点であった。

以下、スペインの文法学者、言語学者らの見解を中心に、lo が意味的にどのような機能を持つと定義されて来たか、統語的機能の面からどのように分析され定義付けられて来たか、また lo を伴う強調構文を生成変形文法はどのように捉えたかを概観し、そこに生起する様々な問題点を論考し、最後に所謂中性定冠詞を語彙論ではどのカテゴリーに同定すべきかについて卑見を述べてみたい。

1.0.

従来、lo を冠詞のカテゴリーに入れるか、代名詞のカテゴリーに入れる

かで争点となっているのは、lo が形容詞または副詞と結び付いてひとつの句を成す場合である。lo がラテン語の指示代名詞 ille を母体として、illud → elo → lo と派生した³⁾歴史的観点を重視すれば、同じ ille から派生した el, la, los, las と同じパラダイムで lo を扱うことになるが、冠詞よりも名詞に近い意味機能や、el, la, los, las が現れることの出来ない言語環境でも lo が現われる、という統語的特性に注目すれば、esto, eso, aquello, ello などの中性代名詞のカテゴリーに lo を入れるべきではないか、という見解も成り立つ。前者の立場に立って論を進めているのが Seco (1961), Alarcos Llorach (1970), Martínez (1970), Lamiquiz (1973), Gutiérrez (1978), Knowles (1978), Carratalá (1980), Lorenzo (1980), Plann (1980), Hernández (1985) らで、Bello (1847) の提唱による後者の立場に大方立つのが Pottier (1970), Criado de Val (1972), Lázaro (1980), Luján (1980), Pilleux/Urrutia (1982) らで、曖昧な立場をとるのが Esquer (1968), Alcina/Blecua (1975), Marcos Marín (1980) らである。強調構文の lo は、Plann (1980) によると数量詞句の指定辞 wh-が移動により S 構造に現れたものとされる。このように大まかに2つのグループに分かれるとは言え、各々の立脚する理論と方法論により、分析の過程と定義にズレがあって、必ずしもグループの各構成員が同じ結論に達したとは言い難い。次の单元では具体的に各論旨の概略を述べる。

1.1.

lo を冠詞として論ずる立場の者も、代名詞の一員あるいは少なくともその一異形として捉える者も共通して指摘するのは、lo が形容詞と結び付いて一個の構造を成す時、el, la, los, las には見られない特別な意味機能を有する点である。

Seco は、lo+形容詞には対象となる事物の全体の一部の性質を表わす制限・限定 (delimitativo), ある同じ性質を有する一連の事物を総称する集合 (colectivo), そしてある性質の強調 (intensivo) の3つのニュアンスがあって、一律に抽象名詞と置換できないと指摘し、以下の例を挙げている⁴⁾。

(4) (制限・限定) lo alto de la torre

(5) (集合) Lo bueno dura poco.

(6) (強調) Comprende lo tonto de tu conducta.

Esquer は、言語 (lengua) のレベルと言 (habla) のレベルで名詞化を捉え、el+形容詞、la+形容詞が何を指しているかを理解するには、言語環境に前提が必要なので、この構造は情況に依存する言レベルでの名詞化であるとし、一方、lo+形容詞ではこうした前提がなくても何を指しているか理解できるので、言語レベルでの名詞化であるとする⁵⁾。

Martínez は、lo+形容詞の構造を、ロマンス諸言語中唯一、ラテン語の中性名詞の真の代替であるとして、その意味機能に抽象性 (lo abstracto)、類型性 (lo genérico)、絶対性 (lo absoluto) を認めている。例えば lo mío などのような lo+所有形容詞は、総体を示すものとして類型性の中に含まれる。また lo が普通名詞に伴う場合の機能として、その名詞 (特に身分を表わす名詞) が示す対象に類型的に見られる性質を抽象化する機能を指摘している⁶⁾。絶対性は el, la などの定冠詞が形容詞と結び付いた時には見られない機能で、対象の事物の形や性質の絶対的な面に言及する。このように Martínez の挙げた 3 つの機能は互いに入り組んでおり、截然と分けられるものではない⁷⁾。

Criado de Val は、意味機能として抽象的事実の陳述、対象の具体化及び強調を挙げ、lo+形容詞と el+形容詞の 2 つの構造を比較して、後者が「人」を前提とする人称化 (personalización) を行なっているのに対し、前者は抽象的事実について述べる中性名詞化の操作である、と指摘している。

(7) lo más ridículo de la reunión

(8) (人称化) el más ridículo de la reunión

抽象名詞との比較では lo+形容詞は対象を具体化する為の操作であって、前者に比して実体を有し、言及された対象の部分の限界を示す働きがあるとして、次の例を挙げている。

(9) lo más alto del cielo

(10) la altura del cielo

強調構文では、副詞の cuán, cuánto にある程度相当する点を指摘している⁸⁾。

Alcina/Blecua は、言語のレベルで語彙を持つに至らなかった様々な事象を、発話の中に盛り込む働きがある点で、ello と lo の間に密接な関係があることを認めている。特に、lo は形容詞を伴って、形容詞の表わす属性を語彙化されなかった事実に向わせるとして、その意味機能に選択(selectivo)と集合(colectivo)を挙げている。選択機能とは、対象に備わる種々の属性の一部を他の属性から極立せることであり、それはまた同時に全体の中での部分を限定することでもある。集合機能とは、複数の語義を持つ形容詞を lo が伴う場合、対象に付与される属性はその形容詞の語義の集合なので、語義の多様性が即ち対象の限定された部分の各相を照し出す、という機能を指す。また、lo が de で始まる前置詞句や lo+形容詞が関係節を伴う場合、行為や概念の総体を示すことも集合機能と言える。以下の2例にあって(11)は選択と集合の2つの機能を合わせ持つ例であり、(12)は集合機能の例である。

(11) lo bueno de esta mujer

(12) Hacer ejercicio es lo mejor de todo.

ただし、強調構文では lo は言及価を失い、副詞 cuán, qué などと同じ機能を持つとする。抽象名詞との対比では、lo+形容詞が前置詞句または関係節によって補文化が行なわれていない時にのみ限って、抽象名詞との置換が行なわれうる場合もあるとして次の2例の差に注目している⁹⁾。

(13) Lo perfecto (=la perfección) es inalcanzable.

(14) lo profundo del pozo

Lázaro は、lo は中性という範疇素性を持つ点で、el, la, los, las と異なり、ello と相補分布して第1辞項(término primario)としての機能を有し、ello, algo などの中性名詞と類を形成する、と言う。意味機能としては、事物の総体を示す機能と、他の部分に対しての一部分が内包する全てのものを指す機能の2つを挙げている¹⁰⁾。

その他にも、Lamiquiz は、lo は el の異形であって、el が形容詞、不定形やある成句(el no sé qué など)の個別的な名詞化を導くのに対して、lo は単に普遍的な性質を現働化(actualización)するだけで、個々の指示性を持たないと言う¹¹⁾。Lorenzo は、知覚の方法と話者の発話条件の面か

ら、はっきり限定できない(または限定していない)対象や、十分に知覚できない対象を、名詞化する機能が lo にあり、話者が対象を明確に述べられない(または述べたくない)場合に用いられると述べている¹²⁾。Pilleux/Urrutia は、lo にはある集合や類を、他の集合や類から峻別する機能がある、と述べている¹³⁾。以上見て来た意味機能をまとめると、次のようになる。

lo の意味機能：

- a) 言及された対象の部分の限定。
- b) 言及された対象の属性の峻別・限定。
- c) 同じ属性の事物の総称。
- d) 類型的な性質の抽象化。(非常に特殊な場合。)
- e) 形容詞の語義の集合的表象。
- f) 照応関係を持たない非文脈依存的言及。
- g) 語彙を言語レベルに持つに至らなかった事象・事物への言及(現働化)。
- h) 対象への直截的な言及の回避。
- i) 属性・様態の強調。

これらのうち、f) g) と h), c) と e) 及び b) と i) はそれぞれ通底する。

1.2.

この単元では、lo の統語機能がどのように分析・定義されて来たかを概観し、概略まとめてみたい。ただし、lo が強調構文を成す際には、形容詞が que 節内の名詞と性数一致する、という特徴が見られるので、これは別の下位単元で扱うことにする。

1.2.1.

lo の統語機能に関しては、今から 140 年程前に Bello がその著 “*Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*” (1847) の中で、冠詞 lo を代名詞 ello の語中音消失形として¹⁴⁾、同じ中性代名詞という範疇に入れた¹⁵⁾事で、その後様々な論義を呼ぶことになった。

Esquer は、中性名詞が存在しない点から、中性冠詞という呼称に疑問を投げかけており、統語機能として名詞化を挙げながらも、一般の冠詞が名詞化を行う場合と異なり、単数とも複数とも分かちがいた対象を表象す

る、と言う意味論的注釈を付している¹⁶⁾。

Alarcos Llorach (1951) は、lo+形容詞の構造を中性冠詞と一体化した抽象的名詞化形容詞と称し¹⁷⁾、同 (1970) では句レベルにおける lo の分布から、動詞と連結するものと動詞以外の品詞と結びつくものの2つに分け、前者を代名詞に後者を冠詞に同定する。冠詞 lo は性数が増減し得る範疇の記号類 (fuerte など) を限定する点で、性に関しては不動な記号類 (libro, obra など) を限定する el, la, los, las と異なる点を指摘している。lo の統語機能は、隣接辞項を核辞項に繰り上げる転用子 (transpositor) としての働きにある¹⁸⁾、としているが、これについては 1.2.2. で詳述する。

Bello の影響を色濃く残す Pottier の説によれば、lo は代名詞的な限定詞として定義され、機能は代名詞のそれに等しい、とする。例として、el indio/lo indio を挙げ、前者が冠詞+名詞から成り立っているのに対して、後者は lo が名詞の機能を担っていると述べている¹⁹⁾。

Martínez は、lo が形容詞の他に副詞も名詞化し、そのうちのいくつかは副詞句として機能する点を指摘している。また、lo+形容詞の構造で形容詞が文中の名詞と性数一致する例を挙げている。

- (15) Por lo *altas* las *pirámides* superan a todos los edificios de la antigüedad.

似た様な例として、冠詞なしで名詞化した形容詞²⁰⁾が、文中の名詞と性数一致する例を挙げている。これは Bello の提示したものである。

- (16) Los edificios de la ciudad nada tienen de $\left\{ \begin{array}{l} \text{grandioso.} \\ \text{grandiosos.} \end{array} \right.$

いずれの場合もこの現象を、一旦名詞化して中性となった形容詞が、名詞化を失い、本来の形容詞としての機能を発揮するのだ、と説明している。lo+関係節は間接疑問と意味的に通底し、副詞 qué と置換できたり、強調のニュアンスを持つ場合は、cuánto と置換できる面を指摘している。更に、Bello が lo を名詞として扱う点を批判し、lo が単独で主語に成り得ない点と、lo+más [menos] (+関係節) の構文が最上級になる点を挙げて、lo が冠詞であることの論拠としている²¹⁾。

Criado de Val は、lo を小詞 (partícula) として捉え、文中の生起する位置によって、動詞句では代名詞、名詞句では名詞化子 (sustantivador) と

して機能する、と定義している。小詞 lo は意味的に ello と aquello と密接に繋り、従って、中性指示詞の esto と eso とも関連するが、ello を除いて、こうした中性指示詞全てと lo が関係節に従えられる点と、lo のみが関係詞 cual をとることができる点を指摘している。こうしたパラフレーズの他に、lo が共起できる文の構成要素に注目して、関係節、形容詞、副詞など全ての自立的要素を伴えるが、不定詞だけが lo による名詞化を受けないと述べている²²⁾。

Alcina/Blecua は、lo を後続の構成要素の意味的方向付けをする名詞化転用子として定義している。ただし、本来の名詞を伴う例もあげ、これは lo を伴わない感嘆文に通底するとして、次の例を挙げている。

(17) Lo artista que es uno.

(18) ¡Artista que es uno!

また、lo は形容詞を副詞に転用すると共に、前置詞を伴わずに副詞句にする例を挙げている²³⁾。

(19) lo primero

Gutiérrez は、lo を冠詞と認めながらも、次に示す書き換え規則が適用される際に、現働化子として代名詞的機能を持つ、と定義している。

(20) $A \rightarrow \text{SN-sust.}$

(A=atributo)

従って、lo+関係節の構文は、動詞が連繫辞である文に生起すると補語となり、そのことの証左として、lo+関係節がこうした文では形容詞に置換できる事実がある、と言う²⁴⁾。

(21) Lo que importa (=Importante) es que la esencia dominical se difunde a toda la semana.

Marcos は、el が言語レベルでの名詞化を行うのに対して (el verde など)、lo は言レベルでの名詞化を行う (lo verde など) として、lo を un + 成句 (un no sé qué など)、el + de + 名詞、el + 不定形、 \emptyset + 不定形における {un, el, \emptyset } と同じく言の名詞化子である、と定義している。逆に言えば、el は言語と言の両方のレベルで、名詞化詞としても機能すると言え

る。loに限らず冠詞は、形容詞と関係詞の前では代名詞との関連を保っており²⁵⁾、むしろ冠詞と言うよりは代名詞であると言えるであろう、と述べている。更に、指示語との機能上の共通点を見出し、両者は非名詞類の言レベルにおける名詞性を指示して、潜在的な名詞を現働化する点で、指呼子 (deícticos), 指示子 (indicadores), 標識子 (señalizadores) の類に属すと定義している²⁶⁾。

Carratalá は、lo+関係節と aquello+関係節が置換できることから、loを代名詞冠詞 (pronombre artículo) と呼ぶ。また冠詞+関係節が疑問詞と置換できることも指摘している。中性冠詞は全ての品質形容詞の名詞化子であると同時に、それらの抽象化にあっては具体化子 (concretizadora de la abstracción) としても機能する点を指摘し、次の例を挙げている²⁷⁾。

(22) Lo cortés no quita lo valiente.

Lázaro は、1.2.1. で触れたように Bello 説を支持しており、論拠として、el+形容詞と lo+形容詞の2つの構造を比較した場合、前者は深層構造において表層構造には現れないある周知の名詞の存在を考えざるを得ないが、後者ではそのような依存性が考えられない点を挙げている²⁸⁾。

Luján (1980) も Lázaro 同様 Bello 説の支持者である。形容詞の名詞化と呼ばれる構造は名詞ではなく、代名詞に付加形容詞が付いた構造であり、この付加形容詞は関係節の縮約されたものと言う結論を、以下の分析の過程から導く。

人称代名詞と冠詞を強形と弱形の関係で捉え²⁹⁾、冠詞+形容詞の構造が、話題化変形における同一指示代名詞削除³⁰⁾→関係節縮約→強勢消失[または→語尾音消失]の規則の操作による結果ならば、この形容詞は他の代名詞とも共起できなければならないとして、uno, algo, alguien と冠詞が、形容詞または関係節を伴う構造でパラフレーズすることを確認している。

こうしてスペイン語には中性冠詞は存在せず、従来中性冠詞として扱われて来た lo は、代名詞 ello の非強勢形即ち弱形であり、生起する言語環境は制限用法の関係節と、いわゆる名詞化された形容詞である、という結論を得る。次に lo が冠詞か否かを定冠詞と不定冠詞の形態上の特色と、統語上の性質である生起の仕方の両面から検討している。

形態面から見ると、lo には複数形がなく数に対して不変である。対応す

る不定冠詞もなく、決して名詞の前に生起しない³¹⁾。また、lo は冠詞が受け容れられない一連の文脈にも生起する点を指摘する。即ち cada の意味で用いられる todo を含む文、proveer, carecer などの特定の前置詞句を伴う自動詞の前置詞句³²⁾、con または sin に導かれる副詞句としての機能を持った前置詞句、あるいはそこに生起する名詞句が、修飾部を伴わない限り冠詞を必要としない ser の述部における生起³³⁾である。次例はその対比の様を示したものである³⁴⁾。

- (23) Todo $\left\{ \begin{smallmatrix} *el \\ *un \end{smallmatrix} \right\}$ hombre debe trabajar.

Todo lo necesario no siempre es bueno.

- (24) Vive sin $\left\{ \begin{smallmatrix} *el \\ *un \end{smallmatrix} \right\}$ lujo.

Vivían con lo necesario.

- (25) Me proveyó de *un libro.

Me proveyó de lo necesario.

- (26) Eso es lo necesario.

次に、ello と lo の相補分布に関しては、まず ello も lo と同様に複数形を持たない点を指摘し、ellos や ellas とこれらを分けて考えるべきことを、等位節によって結ばれた2つの名詞句との照応関係から論証している。関係節を伴う場合、lo は制限用法に用いられ、ello は非制限用法で用いられることと、主語になる場合は ello のみ受容される点をふまえて、こうした相補関係が他の代名詞とその弱形の冠詞の間にも見られることで、lo が ello の縮約形に過ぎないことの証左としている。更に、中性そのものの問題にまで触れ、代名詞の体系に中性を認めているが、これは[±ANIMADO]と言う素性が有標か無標かの観点に立つべきであり、例えば ello は[−ANIMADO]という素性を有し、[+ANIMADO, +HUMANO]である él, ella に対立しているに過ぎない、と言う。また esto, eso, aquello とは[−ANIMADO]という素性では通底するが、ello は人称代名詞の類に属し、前者は指示代名詞の類に属している点で対立する、と述べている。不定形と名詞節に関しては、これらの性は決まっていないので、定冠詞 el によって導かれるが、これは男性/女性という対立において、男性形が無標として機能しているからである、と説明している。以上が Luján の分析過程とその結果である³⁵⁾。

“Linguistic Inquiry”誌上の Knowles (1978) と Plann (1980) の lo

をめぐる論争は、夙に酒井女史によって、『海外言語学情報第1号』で紹介されているので³⁶⁾、本稿では論争の展開の細かい対比は割愛する。

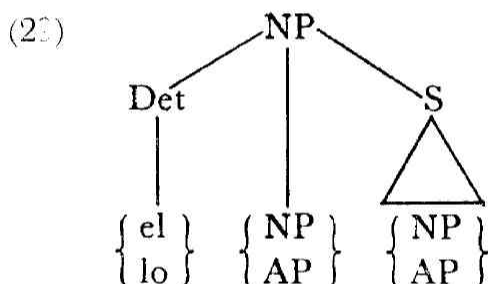
knowles は形容詞句、前置詞句、関係節と共起できる点で、lo を冠詞 el と同じ限定詞のひとつと見るべきである、と主張して次の例を挙げている。

- (27) $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{El} \\ \text{Lo} \end{smallmatrix} \right\}$ bueno es siempre $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{el} \\ \text{lo} \end{smallmatrix} \right\}$ que busco.

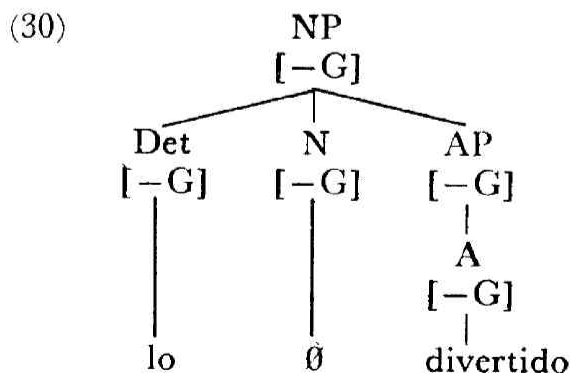
この場合、形容詞は AP に支配されていて、名詞として扱われていない。即ち、knowles の次の結論から分かるように、これは NP に支配される AP の形容詞である。従って、交差範疇規則の句構造規則 $\text{NP} \rightarrow \text{Det A S}$ の Det に、lo が語彙項目として挿入されるので、lo は形容詞の限定詞として扱われる³⁷⁾。

- (28) $[\text{NP} \cdots \bar{\bar{X}} [\text{s} \cdots \bar{\bar{X}}]]$

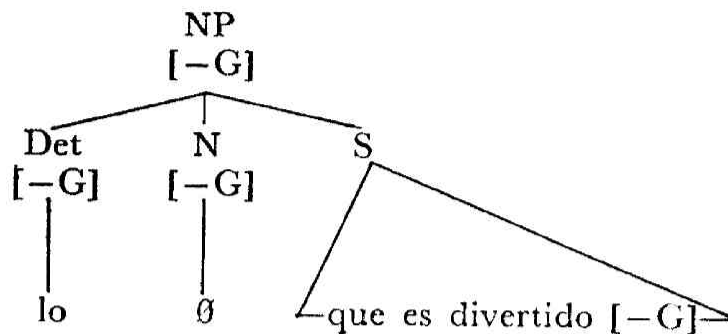
条件: $\text{X} = \text{NP}$ か AP の時



一方, Plann は音韻論的に実現されない主要部の名詞を想定し, Det と形容詞はこの主要部の名詞に性数一致しなければならないとする。この名詞は $[-\text{GENDER}]$ という素性を持っており、即ち中性形である。形容詞の中性形の素性は $[\text{+GENDER}, -\text{FEMININE}, -\text{PLURAL}]$ の男性単数形と一致するので、lo+形容詞と lo+名詞節は次のような構造になると言う。この点では Lázaro の説に類似する。



(31)



つまり, Knowles と違って, lo を冠詞と認めながらも, 実現されない名詞の限定詞として定義している訳である³⁸⁾。

1.2.2.

1.2.1. で伝統文法から生成変形文法に至るまでの, lo の統語機能の分析と定義を概略見て来た。その中には Martínez, Criado de Val, Alcina/Blecua らのように, lo+形容詞+関係節は強調のニュアンスを持ち, cuán や cuánto または qué などの副詞と lo の間にパラフレーズが成り立ち, 感嘆文と近い関係にあることを指摘する学者もいた。この單元では Alarcos Llorach, Knowles 及び Plann の三者が, 強調構文で形容詞が性数変化する場合を, どのように分析して理論付けているかを見, 最後に, lo の統語機能とそれらの機能に基く, 様々な呼称をまとめてみたい。

Alarcos Llorach は, 文の名詞節化と形容詞などの名詞化を, 転用 (transposición³⁹⁾) の概念で説明している。形容詞の名詞化と呼ばれているものは, 冠詞が転用子 (transpositor) となって, 核辞項の名詞に付く隣接辞項の形容詞に, 核辞項としての機能を持たせることであり, 名詞節化とは, que が転用子となって, 文を核辞項にする操作であるが, この時に定冠詞 el を伴うか否かは, 文中のどこに転用された核辞項が現れるかによる, としている。一方, el, la, los, las, lo が転用子となって, 名詞節と一見同一の構造をとる関係節については, 文が que を転用子として隣接辞項となる操作と, 冠詞を転用子として(先行詞脱落による)節の核辞項となる操作の, 二つの段階がある, としている。こうして名詞節化を直接転用 (transposición inmediata), 冠詞+関係節を間接転用と呼んで区別している。次に挙げるのは各々の例である。

(32) el nuevo

El que venga nos preocupa.

Nos preocupa que venga.

(33) El cliente que venga nos preocupa.

El que venga nos preocupa.

lo+形容詞+関係節は、この間接転用によるもので、ある文の補語である属辞が、lo を転用子として隣接辞項から核辞項になったもの、と考える。この時、属辞が性数変化をしたまま核辞項へ転用できるのは、転用子 lo が中性であることから性数に無縁であり、性数によって性格付けられた属辞と、完全に結び付くことができるからである、と説明している⁴⁰⁾。

Knowles の、交差範疇規則を関係節化に認めるべきである、と言う提議の発端となったのは、まさしく強調構文 lo+形容詞[または副詞]+関係節であった。lo+形容詞[または副詞]が NP 1 個に相当することは、この構造に句構造規則が適用され、主語、直接目的語、前置詞の目的語となり、受動変形も受けられる事で立証されるが、もし、今仮に NP としたこの構造を、関係節の先行詞と考えると、元の埋込み文中の痕跡にも同じ構造がなければならない筈だが、次の様に非文になってしまう。

(34) *Este señor está lo borracho.

従って、関係節化は NP に対してばかりでなく、AP に対しても適用を許すべき(スペイン語の場合)である、と言うのが大概の論旨である。NP は Det (限定詞)を有するが、lo は埋め込み文の AP が関係節化によって先行詞の位置に来た時に、限定詞として具現化されると考えており、lo そのものが強調構文を生み出す要素とは考えていない⁴¹⁾。

Plann は Knowles が問題にした構造は、関係節を含まない名詞句であるという立場から、lo+形容詞(+前置詞)、lo+関係節の lo と、lo+形容詞+(Knowles の言う)関係節の lo とでは機能を異にする、と主張する。つまり、後者の場合、形容詞の限定詞ならば形容詞の性数に一致すべきで、el, la 等とならなければならない筈なのに、lo を用いており、この事は [-GENDER] で統一されている前者の構文とは、lo が機能を異にする事の証左である、と言う。そして、後者の構文は、数量について述べているもので、その事は lo が数量詞とも共起できることから分かり、また、こ

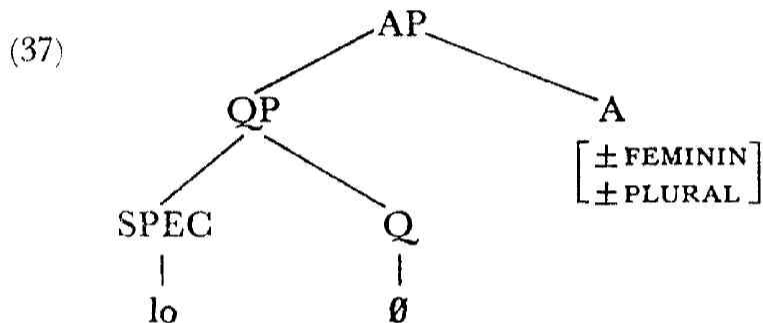
の構文では数量詞を必ずしも必要としないとして、次の例を挙げている。

(35) No sabes lo \emptyset que hemos dormido.

また、もし複数形の形容詞が核ならば、動詞も複数形にならなければならず、補語も性数一致すべきであるが、次例に見るように非文となってしまう、と指摘している。

(36) *Lo divertidas que son estas niñas son asombrosas

以上の点から、この lo は前者の構文と同じ機能、即ち NP の限定詞ではなく、AP の A に伴う数量詞の指定辞 (specifier) であるとして、次の句構造標識を与えている。



この AP は S に支配されており、wh 移動により S を支配する NP の WH の位置に移動され⁴²⁾、その後に SPEC が lo となって具現する、と説く。つまり、Plann にとって強調構文とは、QP を伴う A を支配する AP のことで、基底構造で、すでに [+GENDER] [+NUMBER] のある A と lo が一致するのではなく、 \emptyset Q と一致が行われるのであって、lo と形容詞の性数変化は直接の関係を持たないことになる⁴³⁾。

以上、lo が形容詞や前置詞句あるいは名詞節と結び付く場合と、強調構文の場合とに分けて、lo の統語機能を一通り見て来たが、ここで諸説の要点を一応まとめてみる。

lo の統語機能：

- a) 不定形を除く抽象的名詞化。
- b) 代名詞(または冠詞)と同機能。
- c) 副詞や形容詞の強調。
- d) 副詞句形成。

- e) 感嘆文や疑問文と通底し, *cuán, qué* などの副詞や代名詞と置換可。
- f) 限定詞としての機能。
- g) 冠詞の受容されない文脈にも生起可。

lo の呼称:

- a) 中性冠詞。
- b) 代名詞。
- c) 代名詞的中性冠詞。
- d) 名詞化転用子。
- e) 小詞。
- f) 言の名詞化子 (現働化子)。
- g) *ello* の縮約形。
- h) 意味的具体化子。
- i) 形容詞の限定詞。
- j) 名詞句の限定詞。
- k) 形容詞を統率する数量子の指定辞。

2.0.

この單元では, 1.1. で見た様々な定義や分析の問題点を, いくつか浮き彫りにする。統語面と意味の面が分かち難く結び付いている問題もあるが, 成るべく 2.1. で意味論的側面, 2.2. で統語論上の問題に焦点を合わせて行きたい。

2.1.

先ず, 中性と抽象の混同がかなり見られる点を指摘したい。そこで, 中性と抽象を以下のように定義する。

中性: 統語上の素性に関する分類で, スペイン語では[*—GÉNERO, —PLURAL*]の素性を指す。

抽象: 概念上の素性に関する分類で, 各言語に共通する分類。個々の事物・表象などに共通に見られる性質を, 総体としてひとつの概念にまとめた結果を指し, 言語 (あるいは言) レベルにのみ存在し, 現実には純粹対象として知覚できないもの。語彙項目では【一

CONCRETO] の素性を指す。

例えば, Martínez は, lo blanco では色の名が名詞化され, 色の抽象的性質を表わしている, と述べているが, 今これを el blanco 及び la blancura と比較してみると, lo blanco は l. l. でまとめた意味機能 a) b) 及び g) により, 「白いもの」「白いこと」という意味になる。el blanco は「白」または「白いの」の意味で, la blancura は「白さ」である。一体どれが色の抽象的性質を表わしているかを知るには, スペイン語の色名は, 常に el color+形容詞を前提としていることを思い起せば良い。

(37) ¿De qué color es la pared?

(38) Es de color blanco.

(39) Es blanca.

色名は, ふつう男性名詞で表わされるが, これは el color blanco → el blanco という名詞 color の削除による。同様に「白いの」と言う意味は, el X blanco → el blanco というある男性名詞 X の削除を前提としている。el blanco には「余白」「白人」などの意味もあるが, いずれも比喻から生じた意味である⁴⁴⁾。従って抽象名詞 la blancura には「余白」「白人」の意味は含まれない。つまり, lo blanco も el blanco もある対象に「白い」という属性が付与された⁴⁵⁾表現, という点で具体的である。一方 la blancura はこうした「白い」属性を持つ対象の, 「白い」という属性を抜き出し, 個々の対象の「白」の段階を集合の要素として, ひとつの概念にまとめあげている点で, 抽象的である⁴⁶⁾。以上の観点に立つと, 非常に特殊な例として出された意味機能 d) 「類型的な性質の抽象化」は, 相応しい抽象名詞が語彙項目にない場合を前提として, lo+形容詞がその代用をすることを意味して来る。例えば, 「抽象性」に相当するスペイン語の抽象名詞は語彙項目になく, lo abstracto がその代用をしている。こうした前提条件を良く理解せずに, lo+形容詞と抽象名詞を対比すると, 意味の近似性にひきずられて, ある対象への属性の付与である lo+形容詞と, 意味的に独立している抽象名詞とを混同することになる。前述の Martínez の lo blanco がそれであるが, もうひとつ例を出す。

(13) Lo perfecto es inalcanzable.

Alcina/Blecua は、この lo perfecto は la perfección と置換可能である、と指摘している。しかし、lo perfecto は perfecto という属性が付与される、ある事物の集合を指し、意味機能 c) の「同じ属性の事物を総称」している表現であり、個別的な事物や状態そのものを指しているのではない。lo+前置詞句と抽象名詞が、言及の対象によって制限されている場合を、次の例で見てみよう。

(40) Lo bueno de las manzanas es que sirven para hacer sidra.

(41) Trató de convencerme de la bondad de aquel negocio.

(40) では、「りんご」に備わっている属性のうちのひとつを限定したものであり、(41) は「商売」の属性そのものを指す。(40) は意味機能 b) にあたるが、抽象名詞にはこの機能はない。

(14) lo profundo del pozo

(42) la profundidad del pozo

上記 2 例は、構造としては各々 (40), (41) と同じだが、意味機能に差が見られる。即ち (14) では lo の意味機能 a) によって「言及された対象の部分を限定」しているが、(42) は (41) と同様に「井戸」の属性そのものを指す。

以上のことから次の点が明きらくなる。

- i) 抽象名詞は、自身で意味が完結し、言及の対象を言語環境に必要としない。
- ii) 形容詞に限定された lo は、言語環境に言及の対象を有さない場合は、同じ属性の事物の集合を総体として指呼する⁴⁷⁾。
- iii) 形容詞に限定された lo は、言語環境に言及の対象が示されている時、その対象の属性のひとつを峻別して限定するか、その対象の部分を限定する。この言及の対象を示す言語環境は、lo+形容詞にとって十分条件である。
- iv) el (la, los, las)+形容詞は、言語環境に言及の対象を必要条件として有し、その対象に属性を付与する。この言及の対象は、その素性が冠詞の素性と照応関係にあらねばならない。

次に、lo と中性代名詞の関係について、Pottier は esto, eso, aquello, ello, lo で中性のグループが形成されていると説く。同様の見解を Pilleux

/Urrutia も持つ。Martínez は, esto, eso, aquello は物の集合や名前を示す働きはないが, 特定のものを示すと説く。Alcina/Blecua は非概念的な言及を受け持つ点で, lo はいくつかの指示代名詞や不定代名詞と通じ合い, 中でも ello と密接な関係にあり, また, de で始まる前置詞句を従えて, 前置詞句の核の名詞が示す対象の事実, 行為, 概念の総体を暗示する点で, 指示代名詞と良く似ている, と指摘している。Criado de Val は, 語の派生の上で, lo と ello, aquello は密接な関係にあり, 中性の指示詞 esto, eso と後者は深い関連があると述べている。Carratalá は, lo と aquello は文脈上パラフレーズを成すと指摘し, Lázaro は, 派生の上から lo と ello は él または el の二つの異形で, 常に名詞的機能にあり, algo などと機能上の類を形成する, と述べている。

中性の素性は [-GENDER, -PLURAL] であると上に定義した。これに相当する代名詞は esto, eso, aquello の指示代名詞 3 つに, ello の人称代名詞 1 つ, それに不定代名詞 algo である⁴⁸⁾。Marsá (1984) も指摘するように⁴⁹⁾, これら中性指示代名詞は常に場所的關係⁵⁰⁾ (relación locativa) を示すが, ello にはその働きがない。また yo, tú... などの人称代名詞が持つ [+GÉNERO, +HUMANO] の素性もない。では ello の持つ意味機能は何か。次の例を見てみよう。

(43) Les dije que estaba loco, aunque sabía que $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{ello} \\ *lo \end{smallmatrix} \right\}$ no les sorprendía.

(44) Les dije que Juan estaba loco, pero no me $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{ello} \\ *lo \end{smallmatrix} \right\}$ creyeron.

(45) $\left\{ \begin{smallmatrix} *Ello \\ Lo \end{smallmatrix} \right\}$ que ocurre es que nadie sabe la verdad.

(46) Quería salir e inventó un pretexto para $\left\{ \begin{smallmatrix} *lo \\ ello \end{smallmatrix} \right\}$.

lo との対比も含めて次の事が分かる。

v) ello は単独で生起する lo と相補分布し, 文脈内の節, 文, 不定形の示す内容と照応する⁵¹⁾。

一方, 中性指示代名詞は次の例からも分かるように, lo と完全に置換できる関係にあり, lo との相違は空間的・時間的遠近(多分に心理的なものも含めて)を示す機能の有無にある。

- (47) $\left\{ \begin{array}{c} \text{Esto} \\ \text{Lo} \end{array} \right\}$ que acabas de decir no tiene sentido.
 (48) $\left\{ \begin{array}{c} \text{eso} \\ \text{lo} \end{array} \right\}$ de su fuga.
 (49) No me gustó $\left\{ \begin{array}{c} \text{aquello} \\ \text{lo} \end{array} \right\}$ que me hizo.

不定代名詞 *algo* には、空間的時間的遠近を示す機能はないが、対象の存在の有無や対象の数量を示す、と言う *lo* に見られない意味機能がある。また、意味上自己完結的で抽象名詞と通底する部分がある。次例からも分かるように、*lo*, *ello*, 指示代名詞とも、意味的に置換不可能である。

- (50) Bueno, pensaré en algo.
 (51) Te traigo un bocadillo para que comas algo.
 (52) ¿Has encontrado algo mío?

以上の事柄から次の点が明きらかになる。

- vi) *ello* は、*lo* と [−GÉNERO, −PLURAL] の素性で共通する。この時 *lo* は *ello* の目的格または斜格であるが、素性が示すように、この「人称」と言う呼称は誤解を生むようで相応しくない。
 vii) v) で定義したように、*ello* は文脈内の節、文、不定形などと照応するに過ぎず、こうした機能の他にも、文脈外の対象を指呼したり、対象の部分を限定する中性の *lo* との間には機能上の相違がある。
 viii) 指示代名詞 *esto*, *eso*, *aquello* は、[−GÉNERO, −PLURAL, +DEFECTIVO] の素性で *lo* に共通するが、遠近を示す意味機能を持つ点で異なる。この素性を [±DISTANCIA] とする。

lo を冠詞と同定するか、代名詞と同定するか、の問題に入る前に、まず、*lo* と *el* の意味機能とその素性を明きらかにする必要がある。Lamiquiz が、*lo* を *el* の異形と考え、*el* が不定形や、ある成句も名詞化する点を指摘している、と既に 1.1. で述べた。Carratalá は、*el*, *la*, *los*, *las*, *lo* を (何かの) 代表冠詞 (*artículos representativos*) という類にまとめて、それぞれ男性形 (*el/los*)、女性形 (*la, el/las*) と中性形 (*el/lo*) に分けている。女性形に *el* が含まれるのは、アクセントのある *a-* で始まる名詞に伴う時の形を指したものである。中性形に *el* が含まれる論拠として、名詞節を

el が伴う場合、この el+名詞節は、文脈内で中性の代名詞 ello によって置換される点を指摘している⁵²⁾。以下、強調構文を除いた el と lo の例を挙げて、その中に示される意味素性をまとめて行くことにする。

(53) $\left\{ \begin{matrix} \text{el} \\ *lo \end{matrix} \right\}$ diccionario

(54) $\left\{ \begin{matrix} \text{el} \\ lo \end{matrix} \right\}$ bueno

(55) $\left\{ \begin{matrix} \text{el} \\ lo \end{matrix} \right\}$ de ayer

(7) el más ridículo de la reunión

(8) lo más ridículo de la reunión

(56) $\left\{ \begin{matrix} \text{El} \\ \text{Lo} \end{matrix} \right\}$ que salió esta mañana nos sorprendió.

(57) $\left\{ \begin{matrix} \text{El} \\ *Lo \end{matrix} \right\}$ tener amigos nunca daña.

(58) Esto es $\left\{ \begin{matrix} *el \\ lo \end{matrix} \right\}$ más que puedo hacer en tu favor.

(53) は、el が名詞と共通の素性の [+GÉNERO] を持っていることで成り立つ句であるが、lo は [-GÉNERO] なので成り立たない。また、この時 el は diccionario を限定しているので、[+DETERMINACIÓN] の素性を持っている。(54) の el は、ある省略された男性名詞を前提としていて、文脈の他の場所に生起するその男性名詞と照応関係にあるので、素性は [+GÉNERO, -FEMENINO, -PLURAL, +DETERMINACIÓN, +ANAFÓRICO] である。lo は (53) で見たとおり名詞に伴えないが、ii) で明きらかにしたように、ある対象を指呼するので、素性は [-GÉNERO, -PLURAL, -DETERMINACIÓN, +DEÍCTICO] である。(55) は、el と lo を限定しているのが、形容詞ではなく前置詞句であるが、意味機能からは同じ構造なので、el と lo の素性も (54) と同じである。(7) の el は、同じ理由から素性が (54), (55) と同じである。(8) の lo は、iii) で明きらかにしたように、ある対象の部分を限定するか、属性のひとつを他から峻別・限定する。この機能は文脈に依存するので、素性は [-GÉNERO, -PLURAL, -DETERMINACIÓN, +DEÍCTICO, ±DELIMITACIÓN, ±DISTINCIÓN] である。(56) の el には、2通りの可能性がある。もし、ある省略された男性名詞を前提しているとすれば、(54), (55), (7) と同じであるが、名詞節を伴っているとすれば、節自体に性はないので、el は中

性でなければならない。その場合の *el* の素性は [$-GÉNERO$, $-PLURAL$ ⁵³⁾, $+DETERMINACIÓN$, $-ANAFÓRICO$] となる。*lo* の素性は、限定を受けているので (54), (55), (8) と同じである。(57) の不定形は、性を持たないが主格となっているので、名詞と同じ機能を持っていることになる。従って、(56) と同様に、*el* は中性でなければならない、素性は (56) と同じである。*lo* が生起できないのは、不定形は形容詞や前置句のように、文の他の構成要素を意味的に限定できないからである。*tener amigos* の *amigos* は、統語的には *tener* に統率 (*governar*) されているが、*tener* は意味的に *amigos* を限定しない。何ものにも限定されない *lo* は、代名詞として文脈中の他の要素と照応関係にない以上、文の中で自立できないということも、(57) の非文は示している。(58) は *más* という数量詞を伴っている構文である。数量詞は節を限定することはできないので、隣接の要素 *el* か *lo* を限定することになるが、*lo* は限定を受けても、*el* は他を限定する機能しかないので、この場合、数量子の機能とぶつかって、*el* と *más* は両立できない。純粋に統語論的に見ても、この *que* 節は関係節なので、埋め込み文中の痕跡と *el* は照応関係にあらねばならない、という規則に反している。*lo* の素性は、関係節と数量詞に限定されているので、(54), (55), (8), (56) と同じである。以上の事から次の点が明きらかになる。

- ix) *lo* は、常に他の要素によって限定されて文中に生起する。
- x) *lo* は、文脈内の節、文、不定形などと照応関係を持つ。(男性形人称代名詞の直接目的格を除く。)
- xi) *el* は、ある名詞を限定する。
- xii) *el* は、直接に形容詞、前置詞句、関係節と結び付いて生起した場合、文脈内の他の個所の男性名詞と照応関係にある。
- xiii) *el* は、名詞節または不定形を限定する。

これらをそれぞれ素性で示すと、次のようになる。[$\pm DETERMINACIÓN$] は他の要素を限定する機能を表わし、[$\pm ANAFÓRICO$] は照応関係を表わし、[$\pm DEÍCTICO$] は文脈外のある対象を指呼する機能を表わすが、これには3つの下位素性がある。即ち、[$\pm DELIMITACIÓN$] は指呼された対象の部分の限定、[$\pm DISTINCIÓN$] は指呼された対象の属性のひとつを他から峻別して極立たせる、限定の機能を示す。そして、[$\pm COLECTIVO$] は同じ属性を

有する事物の集合を表す機能を示す。[±DISTANCIA] は対象との空間的・時間的距離を示す。分類の便宜上、統語に関わる素性も一緒にしてあると断っておく。

54)

事例 素性	ix) の lo	x) の lo	xi) の le	xii) の el	ello	esto 類
GÉNERO	—	—	+	—	—	—
PLURAL	—	—	—	—	—	—
DETERMINACIÓN	—	—	+	+	—	—
ANAFÓRICO	—	+	*±	—	+	**±
DEÍCTICO	+	—	—	—	—	**±
DELIMITACIÓN	**±	—	—	—	—	—
DISTINCIÓN	**±	—	—	—	—	—
COLECTIVO	***±	—	—	—	—	—
DISTANCIA	—	—	—	—	—	+

注) * 名詞が省略されると (+) になる。

** 文脈によって (+) か (-) が決まる。

*** 形容詞を伴い、かつ言語環境に言及の対象の表示があると、(-) になる。

この分布表から次の点が明きらかになる。

xiv) 文の他の要素に限定されて生起する lo の素性は、[+DEÍCTICO] の条件下で、esto 類の素性と、lo が対象の部分の限定や属性の峻別をし、esto 類が対象との遠近を示すという点で、これらと相補分布する。

xv) 文脈内の文、節、不定形と照応関係にある lo は、ello と素性が全く一致する。

xvi) 名詞節を限定する el は、名詞の省略が行われない場合の el と、性が有標か無標かにおいて相補分布する。

2.2.

2.2.1.

Luján は、例えば lo que es bueno の構造として、[SN [N ellox] [ō [COMP QUE] [ō ellox ser buen-]]] を与えている。即ち、埋込み文の ello が、関係節化によって縮約形の lo になる、と言う訳だが、ここで問題になるのは、

果して D 構造の \bar{O} の主語に、何ら文脈が与えられていない状況下で, ello が現れ得るかと言うことである。Luján の相補分布の例を見てみよう。

- (59) $\left\{ \begin{array}{c} \text{Lo} \\ * \text{Ello} \end{array} \right\}$ que es bueno, no es obvio.
 (60) $\left\{ \begin{array}{c} \text{Ello} \\ * \text{Lo} \end{array} \right\}$ ⁵⁵⁾, que es bueno, no es obvio.
 (61) $\left\{ \begin{array}{c} \text{Ello} \\ * \text{Lo} \end{array} \right\}$ no es obvio.
 (62) Pretenden basarse en $\left\{ \begin{array}{c} \text{ello} \\ * \text{lo}^{56)} \end{array} \right\}$, que es cierto.
 (63) Pretenden basarse en $\left\{ \begin{array}{c} \text{lo} \\ * \text{ello} \end{array} \right\}$ que es cierto.
 (64) Pretenden basarse en lo cierto.

前単元の例 (43) から (46) と, その結果としての vi) と vii) で明きらかにしたように, ello と lo は統語上相補分布するが, 素性の面ではこの2つは全く重なり相補分布しない。つまり, ここで言う相補分布とは ello が名詞または前置詞に統率されている場合に lo が現われる, という格の上での形態の変化を指しているに過ぎない。一方, lo は, 文中の他の要素によって限定されていれば, 文脈外の事柄に言及でき, 発話の端緒と成れるが, ello は, 文脈が与えられない限り, 文中に生起できないことは, 上記の素性分布表からも明きらかである。ここに挙げた例は, 文脈が与えられていないが, 意味機能を踏まえて (59) と (61) を見れば, そこには統語上の制約だけでなく, 意味上の制約がかかっていることが見えて来る。(61) が成り立つには, 文脈が必要であるが, (59) の場合, que 節は形容詞節であって, 構造上 lo+形容詞と同じであり, ii) で明きらかにしたように, 意味機能 c) 「同じ属性の事物の総称」を有しており, 文脈外の事物に言及できる。一方, ello は, v) で定義したように, 照応関係にあるのが, 文脈内の節, 文, または不定形であって, 意味の主要部は動詞(句)にある。従って, 当然, 形容詞, 前置詞句, que 節などによって意味上限定されないのである。(59) と (63) が, その例である⁵⁷⁾。即ち, (60) から (62) のような [+ANAFÓRICO] を前提とする例では, Luján の考えは当を得ているが, (59), (63), (64) の場合は [-ANAFÓRICO] であって, Luján の与えた [SN [N ellox] [ō [COMP QUE] [ō ellox ser buen-]]] は成りたたなくなる。

では、所謂中性冠詞、即ち従来形容詞等を名詞化するとされて来た lo は、冠詞なのだろうか、という疑問が残る。もし冠詞ならば、名詞を限定するという第一義的働きがあるが、(53) の例で見たように、これは不可能である。また、名詞節を限定する働きがない。冠詞本来の限定する機能がなく、Luján が指摘するように、冠詞が生起できない言語環境に生起する、という事実から、lo が冠詞ではないと、言う結論が導き出される。それに対して、Martínez らが指摘する lo が冠詞であるとの論拠、多くの文法解説書が依って立つ所の論拠は、lo mejor, lo menos などが最上級になるのは、比較級に定冠詞が付いているからだ、という点である。しかし、次の例を見れば、その論拠とする点に矛盾が生じることが分かるであろう。副詞の最上級は冠詞を伴わないからである。

(65) Esto es $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{lo} \\ *0 \end{smallmatrix} \right\}$ más que puedo hacer en tu favor

では、lo mejor の場合は何故最上級になるのだろうか。次の例を見てみよう。

(66) Antonio es el mejor cantante de este pueblo.

(66) の el mejor cantante は、el mejor と言う、名詞を省略した名詞句に書き換えられる。2.1. の冒頭で、el blanco と lo blanco を対比して、どちらもある対象に属性が付与されたものである、と述べた。これを統語面から見ると、lo=el+(X) となる。同様のことが lo mejor と el mejor にも言え、最上級の形容詞が lo を限定すると、*el lo mejor=*el el (X) mejor と言う余剩的な句に成り、el が削除されると言う説明が成り立つ。この事はまた、lo が統語的に代名詞に近いと言うことの証左になる。以上の事から次の点が明きらかになる。

xvii) lo は冠詞ではない。

xviii) lo は統語上 ello と相補分布し、中性指示代名詞と前置詞句を除いてパラフレーズを成す。従って代名詞のひとつである。

2.1. で既に見た通り、lo+ α (α =形容詞、関係節または前置詞句) と意味機能の面で相補分布するのは、中性の指示代名詞 {esto, eso, aquello} の類である。(47) から (49) では、指示代名詞と前置詞句や関係節に限定さ

れた *lo* が、完全に置換できることを確かめた。*lo*+形容詞の場合も、(67) に見る通りパラフレーズを成す。

$$(67) \left\{ \begin{matrix} \text{eso} \\ \text{lo} \end{matrix} \right\} \text{ tuyo}$$

ところが、次の例ではパラフレーズが成り立たない。

$$(68) \left\{ \begin{matrix} \text{Aquello} \\ *Lo \end{matrix} \right\} \text{ alto que allí se ve es una iglesia.}$$

これは論理上の規則を破っている非文で、そのことは強調構文を扱う次の単元で述べるが、仮に、*lo alto* を *aquello alto* とパラフレーズできたとしても、(68) の埋め込み文の痕跡には、*lo alto* が来るので、(69) はやはり非文になる。

$$(69) *Allí se ve lo alto.$$

ii) で明きらかにしたように、*lo*+形容詞は、言語環境内にその言及の対象の表示がないと、その形容詞の示す属性を持った事物の集合を示すことになる。ところが、動詞 *verse* は可視的な対象を示す名詞⁵⁸⁾を要求しているので、ここに矛盾が生じることになる訳である。以上の事から次の点が明らかになる。

- xix) *lo* は、形容詞、前置詞句、関係詞に限定されている時、中性指示代名詞と同価である。また、[+ANAFÓRICO] で関係節に限定されれば、*ello* または *esto* 類と同価である⁵⁹⁾。

2.2.2.

Martínez は、次の例を挙げて、*lo* 自体が強調のニュアンスを持つことを指摘している。これは Alarcos Llorach も引用している例である。

$$(70) ¡Lo que sabe ese hombre!$$

一方、Plann は、次の2つの例を挙げて、(35) が (71) の数量詞 *mucho* が具現化されていない形であるとして、これを以って強調構文の、*lo* は数量詞句の指定辞であることの論拠としている。

$$(71) \text{ No sabes lo mucho/poco que hemos dormido.}$$

$$(35) \text{ No sabes lo que hemos dormido.}$$

しかしながら、必ずしも *lo*+形容詞 [または副詞]+*que* ~ の構造が、強調になるとは限らないことは、次の例からも明きらかである。

(65) Esto es lo más que puedo hacer en tu favor.

(72) Es todo lo bueno que se puede pedir.

また, Plann が, lo+形容詞または lo que ~ の構造における lo を, 音韻的に実現されない名詞 Ø に伴う中性冠詞とし, lo+形容詞 [または副詞]+que ~ の lo を, 関係節内の形容詞を統率する数量詞の指定辞とした時, 念頭にあったのは, Carratalá や Martínez らが指摘する, lo+形容詞 [または副詞]+que ~ と, 間接疑問文の qué, cuán などの疑問副詞との置換可能性ではなかったろうか⁶⁰⁾。しかし, 次の例が示すように, 強調構文が補語の役割を持つ場合は置換できても, 主語になる場合は不可能である。

(73) ¿Vió Vd. $\left\{ \begin{array}{l} \text{lo interesada que} \\ \text{cuán interesada} \end{array} \right\}$ se puso María?

(74) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Lo divertidas que} \\ \text{*Cuan divertidas} \end{array} \right\}$ son estas niñas es asombroso.

こうして, 彼の, 数量詞句の指定辞が wh 移動した後に lo という形を与えられる, という説と, その論拠となった, lo には強調のニュアンスがある, という見解は各々例外があるので妥当性を欠く。

確かに, lo には一見強調 [±INTENSIVO] の素性が元来備わっているように見える。もし, 仮にこの素性がにあるとすれば, 上掲の素性表のいずれかの素性と, 何らかの関連がなければならない。さもないと, lo を伴う構文全てが, 強調を表わすことになってしまうからである。lo が ello の斜格及至目的格でない限り, lo の素性は [+DEÍCTICO] になる。[+DEÍCTICO] の下位素性 [±DELIMITACIÓN], [±DISTINCIÓN], [±COLECTIVO] は, lo を核とする統語構造と, 言及の対象の表示の有無や表示の仕方により, それぞれ有標か無標かが決定する, と上に述べた。強調は, ある対象の属性のひとつを強く訴えるのであるから, [-COLECTIVO] でなくてはならない。統語構造から言っても, lo+形容詞+関係節が前提になるので, [+COLECTIVO] には成り得ない。また, 対象のある部分, あるいは全体の属性を強調するのであるから, 部分を全体に対比させる素性は無標でなければならず, [-DELIMITACIÓN] となる。即ち [±INTENSIVO] は [+DISTINCIÓN] の下位素性である。しかし, [+DISTINCIÓN] になる統語構造は lo+形容詞+de ~ なのに, [±INTENSIVO] では lo+形容詞+que ~ であり, しかも, 形容詞は [+GÉNERO] である。また, 副詞も lo を限定するという統語的

特色がある。とは言え、意味素性としては近い関係にある上に、言及の対象の表示の面でも類似性が見出せるので、とりあえず意味の面から、[+DISTINCIÓN]の下位素性[±INTENSIVO]が、何らかの統語的きっかけを通じて有標となる、という仮説を立てて論考を進めて行く。

[+DISTINCIÓN]という意味機能が成り立つ統語構造は、iii)で明きらかにしたように、形容詞に限定された *lo* が、*de* で導かれる前置詞句内の名詞によって言及の対象の表示を与えられる、という形式を取る。言及の対象の表示という面に限って言えば、関係節内ではあるにせよ、強調構文にも同じ現象が見られる。

- (75) *La envidian por lo tostada que está.*
- (76) *Me preocupa lo tonta que es tu conducta.*
- (77) *Figúrate lo pálido que se puso.*
- (78) *No sabes lo agotadas que se hallan ellas.*

強調構文ではない *lo*+形容詞+*de* ～ では、*de* 以下の名詞句によって、言及の対象が直接的に表示されるのに、強調構文では間接的に表示される場合があるのも、ひとつの相違点である。例えば、(75)(77)は次のような文を基底において前提としている。

- (79) *Su piel de ella está tostada.*
- (80) *Esa monótona insistencia les han agotado la paciencia.*

ここから次のような文が各々の基底構造を成し、関係節化が行われる。

- (81) *Ella está tostada.*
- (82) *Se hallan agotadas.*

即ち、ある対象 α (*piel* や *paciencia* など) が何らかの作用を受けて、ある属性を持つに至る時、 α を一部とするより大きな対象 β に、これらの属性が言語レベルで結び付けられると思われる⁶¹⁾。スペイン語では以下のようになる。

- (83) $\alpha, \beta, V \rightarrow \beta, V [-do]$

これは、強調構文でない [+DISTINCIÓN] の文では起こり得ないことである。次の例 (84), (85), (86), (87) は、[-INTENSIVO] の構造に (75) から (78) を転換したものである。言及の対象が直接表現されている (85) を除いて、全て意味の変化を来たし、非文とまでは言わなくても極めて奇異な文になっ

てしまう。本来の強調すべき属性を持つ対象にずれが生じるためである。

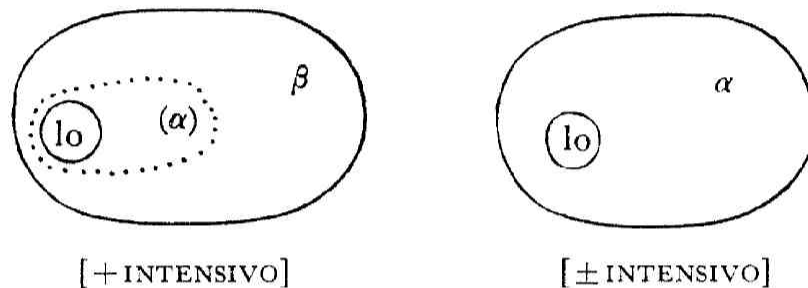
(84) La envidian por lo tostado de ella. (?)

(85) Me preocupa lo tonto de tu conducta.

(86) Figúrate lo pálido de él. (?)

(87) No sabes lo agotado de ellas. (?)

従って、言及の対象が関係節内に直接的に表示されていれば、[±INTENSIVO] 両方の可能性があり、関係節内の表示が間接的であれば、有標 [+INTENSIVO] となることが分かる。図示すれば以下の通りである。



では、[±INTENSIVO] の場合、何が有標化させるのだろうか。例えば (76) と (85) を比べると、(76) では lo を限定する形容詞が [+GÉNERO] になっていて、[-GÉNERO] の lo に対立している。しかも、lo が形容詞ではなく形容詞句に限定されている。この変則性が決して ad hoc なものではないことは、形容詞が [-GÉNERO] であったり、形容詞ではない構文中に言及の対象が表示されると、(88), (89) の例のように、非文になることから確かめられる。ここでは変則性はひとつの機能を与える規則、つまり強調化が行なわれるための条件であることが分かる。

(88) *Me preocupa lo tonto que es tu conducta.

(89) *Me preocupa lo tonta de tu conducta.

更に、本来動詞を限定すべき副詞が、lo を限定すると強調構文になることも、やはり強調化の為の変則性と言える。ただし統語上、強調構文の形容詞と同じく、lo と単独で結び付くことはなく、常に節を伴っているのも、これは副詞が形容詞化されたのだとも解釈できる。しかし、副詞は形容詞類 (adjectival) の構成素であると解釈すれば、わざわざ形容詞化という生成上の過程を想定する必要はない。概念上の構造は、上記の [+INTENSIVO] の図が説明している。例えば、(90) では β は corrió であり、α は言語

レベルには現れないが *velocidad* 等が該当する。言うまでもなく、言語レベルには現れないので [-INTENSIVO] の統語構造, *lo*+副詞+*de* ~ は存在しない。

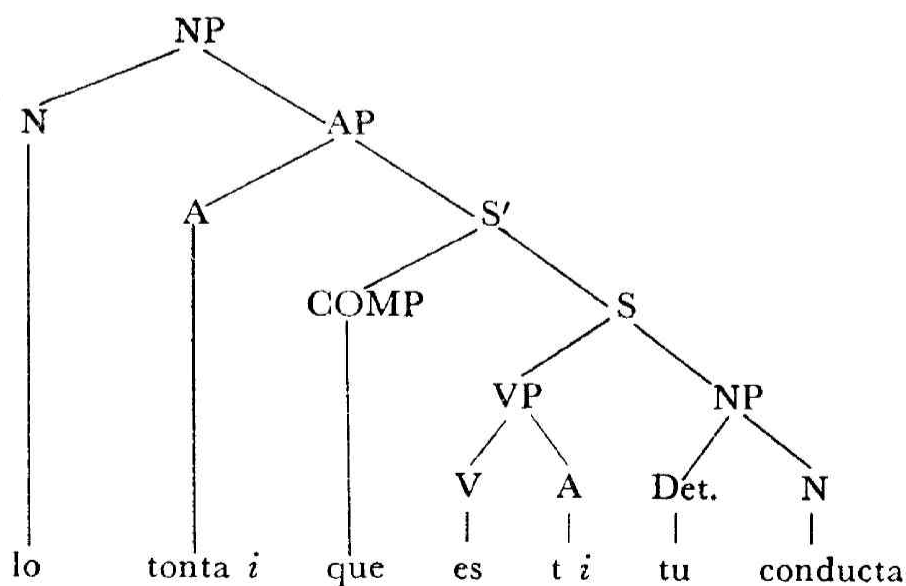
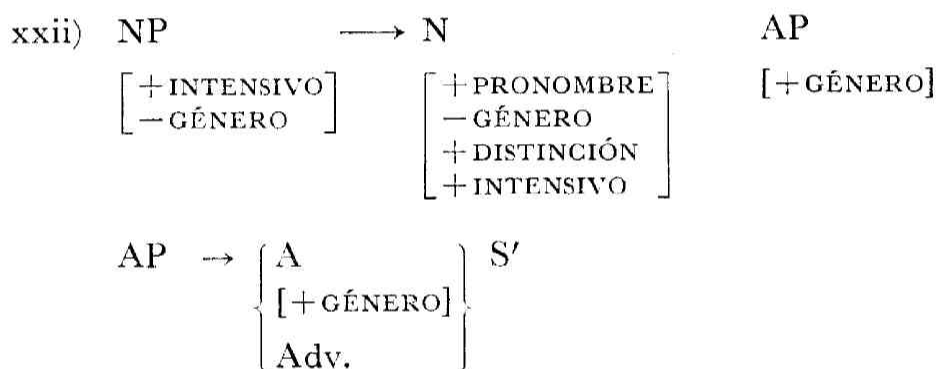
(90) *lo rápido que Juan corrió*

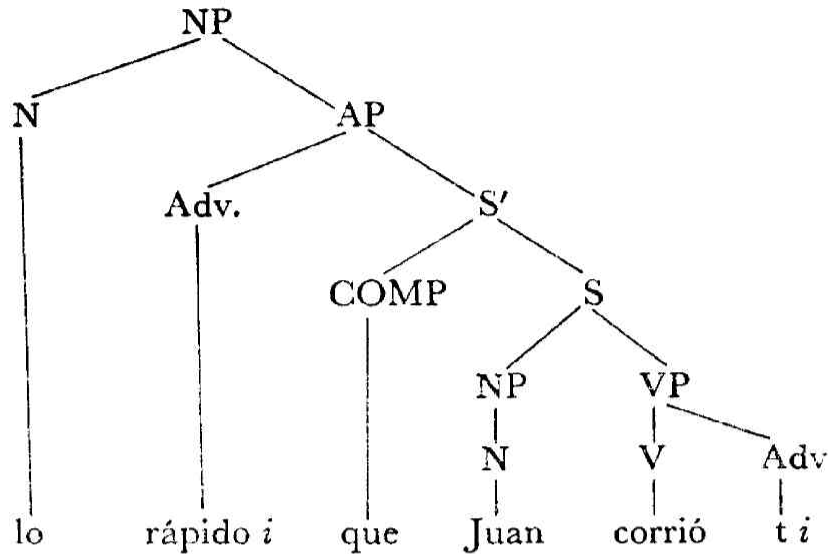
以上の事から、強調構文に関しては次の点が明きらかになる。

xx) *lo* が特殊な言語環境に生起すると, [+DISTINCIÓN] の下位素性 [±INTENSIVO] が有標となる。

xxi) *lo* が [+INTENSIVO] になる言語環境は、形容詞句に *lo* が限定され、形容詞が [+GÉNERO] か副詞の環境である。

この時の統語モデルとして、次の構造が考えられる。





尚, この強調構文が, 埋め込み文となって, 文中に生起した場合, 統語上の性数の一致, 人称・数の一致などの制約の他に, 論理的制約によって非文となる場合がある。

(69) *Lo alto que allí se ve es una iglesia.

(91) *Lo buenas que son las manzanas es que sirven para hacer sidra.

両者ともに, 属性の強調が述部の意味と論理的に結び付かない。(69) に関して言えば, 前述のことと合わせて二重の意味で非文である。

3.

前单元に至るまで, ローマ数字を使って論考の結果明きらかになった点を挙げ, アルファベットを使って lo の意味機能と統語機能をまとめて来た。この单元では, これらの不備な点を訂正し, 冗長な部分を削って本稿の論旨を明白な形で表わし, いくつかの特殊な例にあたっていく。

lo の分類:

- ① 人称代名詞直接目的格として, 男性単数名詞と照応する。素性は [+GÉNERO, -PLURAL, +ANAFÓRICO]
- ② ello の直接目的格・対格として, 文脈内の文, 節, 句⁶²⁾, 不定形と照応する。素性は [-GÉNERO, -PLURAL, +ANAFÓRICO]
- ③ 指示代名詞のひとつとして⁶³⁾, 形容詞, 前置詞句, 関係節に常に

限定されて生起し、形容詞句または副詞に限定されると、強調のニュアンスを持つ。

① は男性名詞と照応する代名詞 *él* の目的格である。② は一般に ① と同類に入れられ、人称代名詞中性形として同定されるが、スペイン語には中性名詞が無いことと、*ello* と照応関係にあるのは、主要部が動詞(句)である文、節、句、不定形であることから、所謂人称代名詞と言う呼称は受け容れ難い。*ello* とその対格及び斜格である *lo* については、代動代名詞という呼称を提唱したい。③ が本稿の中心テーマである所謂中性定冠詞 *lo* である。様々な例から得られた情報に対して、ラテン語からの派生系統に注目した定冠詞説も、(代動代名詞と上で命名した) *ello* の弱形として全て割り切る人称代名詞説も、十分に答えられるものではなかった。確かにラテン語の指示代名詞 *ille* を母体として、*él, élla, ello, aquél* が生まれ、一方では中世期の *elo, ela* を経過して *el, la, lo* が生まれたが、ラテン語からロマンス語へ変移する過程で、中性名詞は男性名詞か女性名詞に吸収されてしまい、元来冠詞のなかったラテン語から派生した *lo* は、*el* との混淆の過渡期を経て、冠詞本来の限定する機能を発揮する相手を失った状態で、一種の先祖返りをしたとは言えないだろうか。それも単なる先祖返りではなく、指示代名詞としての素性 [+DISTANCIA] を失い、[+DEÍCTICO] の素性の下に [±COLECTIVO], [±DELIMITACIÓN], [±DISTINCIÓN], 更に [±DISTINCIÓN] の下位素性として [±INTENSIVO] を自己の内部に発展させて行くことで、新生児の容貌を得たのである。あるいはまた、指示代名詞として [+DEÍCTICO] の素性を持ったまま、形態だけ変化しつつも、*el, la* から疎外された歴史を辿ったのだとも考えられる。いずれにせよ、現代スペイン語の統語構造の中で担う *lo* の機能は、以上の3つに分類でき、形態こそ同じであるとは言え、語彙論では各々別に分類すべきである。因に、*el* も男性名詞を限定する *el* と、節または不定形を限定する *el* とに分けられるが、前出の分布表を見ても分かるように両者は、相補分布するので、ひとつの類にまとめられる。そしてこの [-GÉNERO, -PLURAL] の *el*こそが、言葉の正しい意味における中性定冠詞であると言えよう。

lo の機能と素性：

A) *lo*+形容詞

形容詞の表わす属性を有する事物を、ひとつの集合として指呼する。
素性は [−GÉNERO, −PLURAL, −DETERMINACIÓN, −ANAFÓRICO,
+DEÍCTICO, +COLECTIVO]

B) lo + 関係節

- ① 漠然とある対象を指呼する。
- ② 遠近の概念を持たない点で中性指示代名詞 *esto, eso, aquello* と相補分布する。
素性は [−GÉNERO, −PLURAL, −DETERMINACIÓN, −ANAFÓRICO,
+DEÍCTICO]

C) lo + de ~

前置詞句の名詞が示す対象のある事象を漠然と指呼する。
素性は B) に同じ。

D) lo + 形容詞 + de ~

- ① 前置詞句の名詞が示す対象の属性のひとつを、他の属性から峻別して指呼する。
- ② 前置詞句の名詞が示す対象のある部分を、全体に対比して指呼する。
素性は ① [−GÉNERO, −PLURAL, −DETERMINACIÓN, −ANAFÓRICO, +DEÍCTICO, +DISTINCIÓN]
② [−GÉNERO, −PLURAL, −DETERMINACIÓN, −ANAFÓRICO, +DEÍCTICO, +DELIMITACIÓN]

E) lo + 形容詞 [+GÉNERO] + 関係節

関係節内に示される対象、またはその対象の言語レベルには示されない部分、の属性を強調する。
素性は [−GÉNERO, −PLURAL, −DETERMINACIÓN, −ANAFÓRICO,
+DEÍCTICO, +DISTINCIÓN, +INTENSIVO]

F) lo + 副詞 + 関係節

関係節内に示される対象の動作を強調する。
素性は E) に同じ。

A) の構造が抽象名詞と置換できるのは、統語上においてのみであり、意味的には、ある対象としての集合にある属性を付与する機能と、共通の性質を総体としてひとつの概念にまとめた結果とは相異なるので、代用は

できても置換はできない。

B) の構造と同じ構造を、ello の対格である lo がとる場合がある。この lo は関係節の痕跡に生起できるが、指示代名詞のひとつである lo は、痕跡に生起できない。このことは、後者が統語上必ず他の要素に限定されていなければならない、という規則を犯すことができないだけでなく、言語レベルでは、指示代名詞が指呼詞として単独に存在し得、lo はその下位範疇にあることも意味する。

(92) lo que me dijiste ← Me lo dijiste.

(93) lo que yo busco ← *Lo busco. / Busco aquello.

D) の構造が ① と ② のどちらかの機能を有するかを決定するのは、形容詞と de 以下の名詞の、各々の意味の論理的符合による。例えば (4) や (14) などの例がそうであるし、a lo largo del río のような副詞句においても、② の機能が認められる。

E) と F) の構造は各々に、統語上の変則性は、それ自身において規則性を有せば、特定の意味機能を生じさせる、というルールを示していて興味深い。直接目的語の強調構文も、語順において、また代名詞との照応において、変則性のひとつの例である。しかしながら本稿の中心テーマではないので、いずれ別の機会に論考したい。F) の構造では、しばしば副詞が省略されるが、その副詞が mucho であることは、[+INTENSIVO] には意味を増大させる機能があるからであろう。

以上、明きらかにして来たことを踏まえて、次に特殊な例にあたってみよう、まず、Bello らが指摘しているように、lo が名詞を伴う例がある。これらの名詞は、Criado de Val が指摘するように、lo conde, lo mujer, lo santo のように身分、職業などを示す名詞であって、その名詞が代表する属性を強調したり、その名詞に関連する事象の集合を指呼したりする。これらは、(94) (95) (96) の例に見られるように、構造 A) か E) に生起し、それらと同じ意味機能を呈している。

(94) Todo fue grande en aquel príncipe, lo rey, lo capitán, lo santo.

(95) No sabéis vosotros lo gran persona que es.

(96) ¡Lo artista que es uno!

このことは、これらの名詞が形容詞化したことを示す、と言える。本稿の分類による ② の lo, 即ち ello の対格または斜格の lo は、周知のように連繫辞の後の名詞に、形容詞と同様に、[−GÉNERO, −PLURAL] として照応する。一方 lo を伴う名詞は、他の事象から主語の属性を峻別して同定する機能を持つ。この名詞と形容詞との機能上の交差こそ、「何らかの統語的きっかけが、新しい機能を生み出す」という、前述の仮説の証左たりうるであろう。

次に (15) の例で見たように、lo+形容詞を含む前置詞句で、形容詞が文脈内の名詞の性数に一致する場合があるが、これらは E) または F) の構造の関係節が削除されたものと考えられる。

- (97) Por lo altas (que son) las pirámides superan a todos los edificios de la antigüedad.

また、逆に強調構文であるべき E) や F) 構造が、統語的にあるいは意味的に更に限定を受けると、強調構文にならない例がある。ひとつは todo による限定であり、ひとつは [+SUPERLATIVO] の素性を形容詞や副詞が有している場合である。以下がその例である。

- (72) Es todo lo bueno que se puede pedir.

- (98) La aventura me ha costado lo menos que podía costarme.

これは lo+形容詞, lo+副詞がこれらの条件下では、一個の名詞としての価値を有するからである、とも言えよう。

最後に、辞書によっては名詞として分類されている形容詞が、el と lo を各々伴った場合について触れる。

- (99) el largo de esta fachada

lo largo de esta fachada

- (100) por el contrario

por lo contrario

本稿では、抽象名詞を定義した時、抽象とは個々の事物・表象などに共通に見られる性質を、総体としてひとつの概念にまとめた結果である、と述べた。(99) では lo が生起している構造は D) であり、fachada の持つ属性のひとつを峻別すると共に、その部分を指呼している。それに対して el largo は la longitud に相当しており、ひとつの抽象名詞である。(100)

では、lo contrario は文脈の中で既に述べられた事柄とは逆の事物・事象の集合を指呼しているのに対して、el contrario は「逆」という性質そのものを指しているのもので、ひとつの抽象名詞である。このように、ひとつの名詞が形容詞から派生する時、あるいは転用される時、形態を変えた段階（例えば blanco に対して blancura のような）に進まずに、元の形態にとどまって抽象名詞となると、言語運用の面で意味の均質化が図られ、Martínez の言う「el と lo の間で揺れる名詞化」になって現れるものと思われる。似た様な例に「裸体画」の意味で用いられる el desnudo がある。これは、もちろん、名詞が省略された「裸の人」とも解釈が可能である。

4.

本稿では、意味と統語の両面から、lo について論考して来た。得た結論は、形態が同じであっても、語彙論では、意味機能・統語機能で齟齬すれば分けるべきこと、意味的に自個完結せず、統語的にも自立しにくい語は、他の文構成要素の類に系統付けて同定すべきこと、語の歴史上の派生如何にかかわらず、共時的観点に立って類を定めるべきことであった。こうして、0. で述べた疑問点に一応の解答が得られたと思う。即ち、lo は冠詞の類に属すのではなく、指示代名詞の下位範疇か、ello の目的格・斜格か、人称代名詞の目的格のいずれかに属すのであり、中性即ち抽象ではないのである。以下 lo の分類同定を分布表を用いて示す。

素 性 \ lo の属す 範疇	人称代名詞	代動代名詞	指示代名詞
	目 的 格	目的格・斜格	下 位 範 疇
GÉNERO	+	—	—
PLURAL	—	—	—
DETERMINACIÓN	—	—	—
ANAFÓRICO	+	+	—
DEÍCTICO	—	—	+
COLECTIVO	—	—	±
DELIMITACIÓN	—	—	±
DISTINCIÓN	—	—	±
INTENSIVO	—	—	±

注

- 1) 例えばデンマーク語のように、名詞が索性[±NEUTRO]によって二大別される言語では、冠詞も普通名詞[−NEUTRO]に伴う *en* と中性名詞に伴う *et* の二種類がある。定冠詞か不定冠詞かは名詞との位置関係により機能が決定する。
例. *en stol, stolen / una silla, la silla*
et bord, bordet / una mesa, la mesa
- 2) ラテン語の中性単数名詞は第2変格において男性形との類似からスペイン語で男性形へ、中性複数名詞は同様に女性形となった。前者・後者とも対格が類似点である。一方ギリシア語源の中性は第1変格のラテン語との類似から女性形となった。詳細は Gili Gaya (1966), Martínez (1970), Criado de Val (1972), Resnick (1981), Lapesa (1981) を参照。尚、Lapesa はアストゥリアス地方を中心とした方言に、“neutro de materia” と呼ばれる、可算名詞を複数を示す単位で表現する場合、名詞の語尾が /-u/ となって屈折しない現象を指摘しているが(同 p. 99, p. 489), 本稿の主題を外れるので扱わない。
- 3) Gili Gaya (同, p. 79) 及び Marcos Marín (1977, p. 105) 参照。
- 4) Seco (1961, p. 216)
- 5) Esquer (1968, p. 185-88)。同様の観点に立ちながら、Marcos Marín は言語レベルでは男性と女性の2つの性しかないので、中性である *lo*+形容詞の構造は談話(discurso, ここでは *habla* と同義)レベルの名詞化であるとする。(1980, p. 184-188)
- 6) 同様の指摘が Bello (1847, 2ª ed., 1978, p. 291-292), Criado de Val (1972, p. 27), Alcina/Blecua (1975, p. 571) に見られる。特に Alcina/Blecua は強調構文のひとつの例として挙げている。
- 7) Martínez (同, p. 909-910, p. 916)
- 8) Criado de Val (同, p. 21-27, p. 71, p. 262)
- 9) Alcina/Blecua (同, p. 568-571, p. 584, p. 10-40)
- 10) Lázaro (1980, p. 53-58)
- 11) Lamiquiz (1973, 2ª ed., 1974, p. 299)
- 12) Lorenzo (1980, p. 15)
- 13) Pilleux/Urrutia (1982, p. 84)
- 14) Bello (同, p. 290)
- 15) Bello は、*ello* と *lo* が文中に先行する名詞を受けずに、不定形と節という男性形でも女性形でもないものを受ける点に注目し、不定形と節が中性ならば当然それを受ける代名詞も中性でなければならない、と述べ、*ello* と *lo* には中性という共通の価があるほかに、節や不定形を受ける場合、統語的相補関係を成すという事実を、次の例で示している。

Estábamos determinados a *partir*, pero hubo dificultades en *ello*,
y tuvimos que *diferirlo*.

また、*lo* は *ser*, *estar*, *quedar* などの動詞の補語の代理をする時に用いられ、こうした補語の性に左右されないが、*ello* はこの言語環境には生起できない。

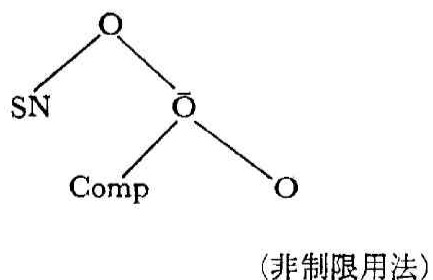
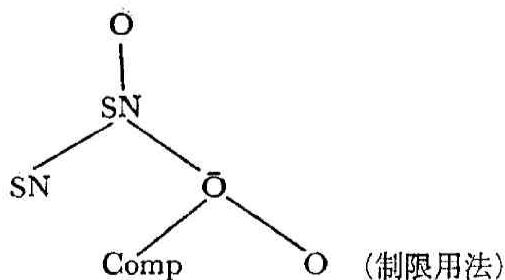
一方, ello は単独で主語と成るが, lo は単独で主語としての機能を持つことはない点を挙げている。勿論, こうした ello と lo の相補関係を認める際に, 両者が同じ意味機能を持つ点を前提にしているのは論を俟たない。従って, lo には男性名詞の代名詞としての lo と中性代名詞の lo の2つがあることになる。

代名詞 lo と冠詞 lo を同一の範疇にまとめる過程も ello と lo の相補関係(多分に意味を重視したものだが)にある。結論として中性の lo は何らかの修飾部を伴う場合 (lo blanco, lo de ayer, lo que nos agrada など) と, 何ら限定を受けない場合 (Lo creo. など) の二通りの生起の仕方をし, 後者は ello と純粋に統語的相補分布をする点から見て, ello の対格形であると言う。(同, p. 116-118, p. 121, p. 290)

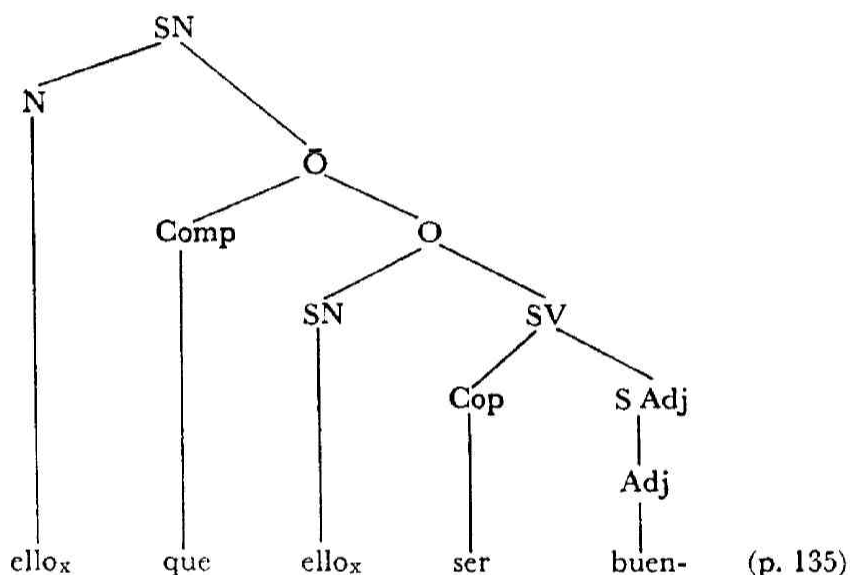
- 16) Esquer (同, p. 186)
- 17) Alarcos Llorach (1951, p. 67)
- 18) 同 (1970, p. 235, p. 238)
- 19) Pottier (1970, versión española 1975, p. 71)
- 20) 定冠詞を伴わない形容詞が抽象名詞を作る例として, 次のものを挙げている。
 Más vale malo conocido que bueno por conocer. (p. 912)
- 21) Martínez (同, p. 910, p. 915)
- 22) Criado de Val (同, p. 22, p. 27)
- 23) Alcina/Blecua (同, p. 569, p. 571, p. 711)
- 24) Gutiérrez (同, p. 190-193)
- 25) 冠詞がラテン語に存在せず, 指示代名詞 ille が母体となって ille → el → el / illa → ela → la, el / illu → elo → lo となった過程を指す。Marcos (1977, 5ª ed., 1981) 及び Resnick (1981) 参照。
- 26) Marcos Marín (1980, p. 234-237)
- 27) Carratalá (同, p. 220, p. 231, p. 243)
- 28) Lázaro (同, p. 57)
- 29) 人称代名詞 (él, ella など) はアクセントを有するが, 制限用法の関係節に従える時は, アクセントを失い, 後に音韻規則によって縮約されるか, 語尾音消失が起きる。ただし非制限用法の場合は人称代名詞は何ら変形を受けない。例として次の2つを挙げている。(p. 125)

$$\begin{cases} \text{No se refería a } \begin{Bmatrix} \text{ellas} \\ * \text{las} \end{Bmatrix}, \text{ que eran muy famosas} \\ \text{No se refería a } \begin{Bmatrix} * \text{ellas} \\ \text{las} \end{Bmatrix} \text{ que eran muy famosas} \end{cases}$$

制限用法と非制限用法の句構造標識は各々次に示す通りである。(p. 92)



- 30) W-SN_x-X-Comp-Y-SN_x-Z ⇒ 1, 2, 3, 4, 5, 0, 7
 1 2 3 4 5 6 7 条件: 6 が SP の一部でない時 (p. 91)
- 31) 1.1. 及び注 6) で見たとおり名詞の前に lo が生起する例があるが, Luján は現代スペイン語の用例とはみなさないのかも知れない。しかしながら, Luján の論点はスペイン語には中性名詞が存在しないところにある。
- 32) Me proveyó del libro que necesitaba. の del の冠詞は関係節化の結果付与されたものと説明している。(p. 131, n 5)
- 33) Es el médico. のような言い方もあるが, これは wh 疑問を前提とする ¿Quién es X? に対する答であって, 機能は指向的なものであるので同日の論ではない。(p. 134)
- 34) ただし, 全例とも冠詞を伴わない名詞ならば受容される。
- 35) Luján (同, p. 117-141)。因に lo que es bueno の句構造標識は次の通りである。



- 36) 酒井優子 (1981, p. 314-319)
- 37) Knowles (1978, p. 505-510)
- 38) Plann (1980, p. 607-609)
- 39) ある機能の範疇に属す記号が, その他の機能を持って文の内部の構造を変えることを言う。(Alarcos Llorach, 1970, 3ª ed., 1980, p. 238)
- 40) Alarcos Llorach (1970, p. 239-245)
- 41) Knowles (同, p. 505-510)
- 42) [NPWH S] 構造については Jackendoff, R. (1977) *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*, Linguistic Inquiry Monograph 2, MIT Press, Cambridge, Massachusetts 参照。
- 43) Plann (同, p. 609-613)
- 44) Martínez が, 名詞化が具体的なものになる時は el を用いるとして, 例に出している el blanco del ojo (p. 911) も比喩である。
- 45) この対象への属性の付与が, 意味機能 a) にある「対象の部分の限定」を必要とする。

- 46) 『色の手帖』(小学館, 1986) は各色を印刷した一種の色見本であるが, 白 (p. 202) と黒 (p. 210) には次の説明が付してある。「あらゆる波長にわたる可視光線を反射する物体を見て感じられる色。ただし, 完全な白は現実には存在しない。」「あらゆる波長にわたる可視光線を吸収する物体を見て感じられる色。ただし完全な黒は現実には存在しない。」こうしたことから, el blanco 「白色」を抽象名詞だと言うのはあたらない。頂度, 「点」や「線」が3次元である現実世界には存在しないから抽象名詞だ, と言うのと同じで, 誤った論理である。抽象は, 共通の性質をひとつの集合としてくくることであって, 絶対唯一の究極に向かって進む思考とは逆方向にある。lo blanco はある対象に「白い」という具体性を与えた表現であり, その指呼の方法が「曖昧」であるのを, 通俗に「抽象」と言っているに過ぎない。けだし, 「具体的な属性を付与して何かを指すこと」は「抽象概念を指すこと」ではない。
- 47) 抽象名詞は共通の性質を総体化したもので, 共通の性質を持つ事物の総称ではない。
- 48) 代名詞のうち冠詞をとるもの, [+HUMANO] の素性を持つもの, 名詞に転用可能なもの, 形容詞に転用可能なもの, 及び文の素性や構造を変える機能を持つものは除外した。(Esbozo, 1977, p. 213-236 参照)
- 49) Marsá (1984, p. 98)
- 50) この場合, 現実的空間的な場所を示すだけでなく, 心的あるいは時間的な位置をも示す。場所格については拙稿 “Aspectos del locativo en la lengua española” (上智大学, 1975 (修士論文)) を参照されたい。
- 51) Bello は, ello が文脈外の事物・事象を表わす例を挙げて, ello は, この時母体であるラテン語の本来の意味である, la cosa や el hecho を保っている, と注釈しながらも, Bello 自身これを成句とみなしている。(同, p. 290) 尚, 本稿では, こうした Ello es que... (=La verdad del caso es que...), en esto [eso] (=entonces), a eso de, esto es, と言った成句は比喩とみなして扱わない。
- 52) Carratalá (同, p. 243-245)
- 53) 名詞節が性を持たない点は, Lamiquiz が証明しているが, 数の概念とも無縁であることを, Luján が次の例で示している。
- Les dije que Juan estaba loco y que se había escapado, pero no me lo creyeron. (1980, p. 136)
- 54) ix) と x) の場合の lo が, [-GÉNERO] であることの有力な証左となる指摘が, Luján によって成されている。即ち, [+HUMANO] の素性を持つ(本稿では付与されたと考える)形容詞と, lo が結び付かないという点で, 次の2つの例を挙げている。
- *lo que está contento / *lo contento (1980, p. 139)
- 55) この箇所は原典では(,)が脱落しているが, そこに至るまでの論理の展開と活字の組み具合から判断して, 本稿では(,)を補って入れた。
- 56) ここの原典は la に成っているが, 次の例と対比させる格好に成っているので, 誤字として本稿では lo と訂正して入れた。
- 57) 非制限用法で生起できるのは, 島の制約による。注 29) 参照されたい。
- 58) あるいは, 視覚として捉えられるような抽象名詞を要求する場合もあるだろ

- うが、いずれにせよ、知覚の焦点が絞り込まれる対象(を表す名詞)を要求している点に変わらない。
- 59) ello は、(47) から (48) 及び (67) において、指示代名詞とパラフレーズを成さない。パラフレーズを成すのは、主語として単独に現れる場合であるが、ello は文脈内の節、不定形などと照応関係にある、という前提が必要であるのに対して、指示名詞はこうした統語上の前提を必要としない点が相違しているのは、言うまでもない。
- 60) Alcina/Blecua はこの場合の主文の動詞には知覚や認識を意味する動詞が多いことを指摘している。(同, p. 571)
- 61) この操作は各言語によって適用できる場合とできない場合とがある。(81) は日本語でも「彼女は焼けている」と言えるが、(82) の表現は意味を変えずに訳出することができない。
 *「彼女らは酒渴していた。」
 *「彼女らは尽きていた。」
- 62) ¿Está Vd. bien? — No, no lo estoy.
 ¿Es Vd. japonesa? — Sí, lo soy. に見られる lo を指す。
- 63) Hernández (1985) は人称代名詞として分類するのは音声学上、分節上問題がある点を指摘しているが (p. 121-122), 同様の理由から Criado de Val の小詞という命名も不適當である。

参 考 文 献

- Alarcos Llorach, Emilio. *Gramática estructural*. Madrid: Gredos, 1ª ed. 1951, 2ª ed. 1969.
- . *Estudios de gramática funcional del español*. Madrid: Gredos, 1ª ed. 1970, 3ª ed. 1980.
- Alcina Franch, Juana/Blecua, José Manuel. *Gramática española*. Barcelona: Ariel S. A., 1975.
- Bello, Andrés. *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*. Madrid: EDAF Ediciones-Distribuciones, S. A., (1ª ed. 1847.) 1978.
- Carratalá, Ernesto. *Morfosintaxis del castellano actual*. Barcelona: Labor S. A., 1980.
- Criado de Val, Manuel. *Fisonomía del español y de las lenguas modernas*. Madrid:
- Esquer Torres, Ramón. *Didáctica de la lengua española*. Madrid: Alcalá, 1968.
- Gutiérrez, María Luz. *Estructuras sintácticas del español actual*. Madrid: Sociedad General Española de libros S. A., 1978.
- Hernández Alonso, Cesar. “Lo, artículo o pronombre?” *Anuario de lingüística hispánica*, Universidad de Valladolid, 1985, 115-127.
- Knowles, John. “A Cross Relative from Spain.” *Linguistic Inquiry* 9, 1978, 505-510.
- Lamiquiz, Vidal. *Lingüística Española*. Sevilla: Publicaciones de la Universidad de Sevilla, 1974.

- Lázaro Carreter, Fernando. *Estudios de lingüística*. Barcelona: Crítica S. A., 1980.
- Lorenzo, Emilio. *El español y otras lenguas*. Madrid: Sociedad General Española de libros S. A., 1980.
- Luján, Marta. *Sintaxis y semántica del adjetivo*. Madrid: Cátedra S. A., 1980.
- Marcos Marín, Francisco. *El comentario lingüístico — metodología y práctica*. Madrid: Cátedra, 1ª ed. 1977, 5ª ed. 1981.
- . *Curso de Gramática Española*. Madrid: Cincel S. A., 1980.
- Marsá, Francisco. *Cuestiones de sintaxis española*. Barcelona: Ariel S. A., 1984.
- Martínez Amador, Emilio M. *Diccionario gramatical y de dudas del idioma*. Barcelona: Ramón Sopena S. A., 1970.
- Pilleux, Mauricio/Urrutia, Hernán. *Gramática transformacional del español*. Madrid: Alcalá S. A., 1982.
- Plann, Susan. "The Nonevidence for a Cross Relative from Spain," *Linguistic Inquiry* 11, 1980, 607-613.
- Pottier, Bernard. *Gramática del español*. (versión de Antonio Quilis) París: 1970, Madrid: Alcalá S. A., 1975.
- Resnick, Melvyn C. *Introducción a la historia de la lengua española*. Washington, D.C., Georgetown University Press, 1981.
- 酒井優子, 「スペイン語語彙論など」『海外言語学情報第一号』。東京: 大修館書店, 1981, 309-320.
- Seco, Manuel. *Diccionario de dudas de la lengua española*. Madrid: Aguilar, 1ª ed. 1961, 8ª ed. 1982.

尚, 本稿に用いた用例はこれらの文献に準拠したものである。その他は *Diccionario Planeta de la lengua española usual* および *Diccionario de uso del español* (María Moliner) に基いた。